10 古文の基本

学習目標
- 現代の日本語と異なる、古文のルールを確認しよう。
- 古文を読むために必要な基本知識を、整理して覚えよう。
- 問題を解くことで、古文の基本知識を確実に身につけよう。

要点のまとめ

1 歴史的仮名遣い

古典で使われている仮名遣いを「歴史的仮名遣い」という。現代仮名遣いとは表記のしかたが異なるので、読み方を覚えておく。

歴史的仮名遣い	読み方	例
語頭以外の はひふへほ	は→わ ひ→い ふ→う へ→え ほ→お	あはれ→あわれ こひ→こい（恋） とふ→とう（問う） かへで→かえで（楓） とほし→とおし（遠し）
ぢ・づ	ぢ→じ づ→ず	なんぢ→なんじ いづれ→いずれ
を（助詞以外）	お	をかし→おかし
ゐ・ゑ	ゐ→い ゑ→え	くれなゐ→くれない（紅） こゑ→こえ（声）
「ア段」の音＋う（ふ） →オ段の長音		たうじ［tau→tô］→とうじ（当時） つがふ［gafu→gau→gô］→つごう（都合）
「イ段」の音＋う（ふ） →「イ段」の音＋ゅう		うつくしう［siu→syû］→うつくしゅう じふごや［jifu→jiu→jyû］ →じゅうごや（十五夜）
「エ段」の音＋う（ふ） →「イ段」の音＋ょう		せうそく［seu→syô］→しょうそく（消息） てふ［tefu→teu→tyô］→ちょう（蝶）

○つ ○や ○ゆ ○よ	○っ ○ゃ ○ゅ ○ょ	取つて→取って ひやくやく→ひゃくやく（百薬） ちゆうごく→ちゅうごく によらい→にょらい（如来）
くわ・ぐわ	くわ→か ぐわ→が	くわじ→かじ（火事） さんぐわつ→さんがつ（三月）

2 古典で使われる言葉

古典で使われている言葉を、古語という。

❶現代では使われなくなった言葉

例		
いと	とても・たいそう	いみじ	すばらしい・甚だしい
具す	連れて行く	げに	なるほど・本当に
さらなり	言うまでもない	ゆかし	……したい

❷現代とは違った意味で使われている言葉

例		
あはれ	古語	しみじみとした情趣がある・かわいい
	現代語	気の毒だ・みじめだ
やがて	古語	そのまま・すぐに
	現代語	しばらくして・そのうち

※陰暦（いんれき）十二ヶ月の異称も古語に当たる。現代の季節感とのずれに注意。
春＝睦月（むつき）（1月）・如月（きさらぎ）（2月）・弥生（やよひ）（3月）　夏＝卯月（うづき）（4月）・皐月（さつき）（5月）・水無月（みなづき）（6月）
秋＝文月（ふみづき）（7月）・葉月（はづき）（8月）・長月（ながつき）（9月）　冬＝神無月（かんなづき）（10月）・霜月（しもつき）（11月）・師走（しはす）（12月）

3 主語・助詞の省略

▪古文では主語や助詞が省略されている場合が多い。
→登場人物を確認し、前後の内容から主語を捉えることが必要。
→自然な文章になるように助詞を補って、文脈を捉える。

例　比叡の山に稚児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせん。」と言ひけるを、この稚児、心寄せに聞きけり。「さりとて、し出ださんを待ちて寝ざらんも悪かりなん。」と思ひて、片方により て、寝たるよしにて、出でくるを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめきあひたり。

登場人物1（が）　登場人物2（が）　（は）

※前の文と同じ主語なので省略されている。稚児は
※文の途中で主語が変わることがある。僧たちは

（「宇治拾遺物語」より）

比叡山延暦寺に、見習いの少年がいた。僧たちが、夜の暇なときに、「さあ、ぼたもちを作ろう。」と言ったのを、この見習いの少年は、期待して聞いていた。「そうは言っても、作り始めるのを待って寝ないのもよくないだろう。」と（見習いの少年は）思って、隅の方によって、寝ているふりをして、（ぼたもちが）できるのを待っていたところ、（僧たちは）すでに作り始めた様子で、騒ぎ合っている。

4 会話文

かぎかっこの付いていない会話文は、次のような言葉に着目して捉える。

❶会話文の後の言葉

（会話文）＋（と／とて／など）言ふ／答ふ／申す　など

会話文の後に付いて、引用を示す。
→直前までが会話文

例　会話文「この山の名を何とか申すと問ふ。」
（「この山の名を何と言うのか」と尋ねる。）

❷会話文の前の言葉

（人物）＋いはく／いふには／いふやう／申すやう　など

会話文の前に付いて、引用を示す。
→直後からが会話文

例　獅子王申しけるは、会話文「我、獣の王たり。」
（獅子王が申したことには、「私は、獣の王だ。」）

5 係り結び

古文の文中で、係助詞の付いている文節が係っていく文節の末尾が、終止形ではなく、連体形や已然形で結ばれることを、係り結びという。

係り結びの組み合わせ

※係助詞は「係りの助詞」ともいう。

係助詞	結び	意味	例
ぞ／なむ	連体形	強調	例　花ぞ昔の香ににほひける（係助詞／連体形）（花は昔のままの香りで咲きにおっている）
や／か	連体形	疑問／反語	例　日の入る所と洛陽と、いづれか遠き。（係助詞／連体形）（日が沈む所と洛陽では、どちらが遠いか。）
こそ	已然形	強調	例　一生を苦しむるこそ愚かなれ。（係助詞／已然形）（一生を苦しめるのは愚かなことだ。）

※反語は、疑問の形で「……だろうか、いや、……ない」などと訳す。
※現代語訳する場合、強調は特別な表現を用いる必要はない。
※已然形とは、古文特有の活用形。

例

例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
愚かなり	愚かなら	愚かなり／愚かに	愚かなり	愚かなる	**愚かなれ**	愚かなれ

確認問題

1 歴史的仮名遣い　次の言葉を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

① をどり（踊り）　□

② みづ（水）　□

③ まゐる（参る）　□

④ きふ（急）　□

⑤ ぐわん（願）　□

⑥ じやうず　□

⑦ てうど（調度）　□

ポイント　④は、「『イ段』の音＋ふ」の形なので「『イ段』の音＋ゆう」という形に直す。⑦は、「『エ段』の音＋う」の形なので、「『イ段』の音＋よう」の形に直す。

2 歴史的仮名遣い　次の――線を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

① 谷のかたはらに鍛冶小屋といふあり。
谷のそばに鍛冶小屋というものがある。　□

② かるがゆゑに、二つながらこれを失ふ。
このようなわけで、二つともこれを失う。　□

ポイント　②の「ゑ」は、現代では使われない平仮名。形と読みを正しく覚える。

3 古語の意味　次の古語の意味として適切なものを後からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、記号は一度しか使えません。）

① をかし　□

② あやし　□

③ うつくし　□

ア かわいらしい　イ 趣がある　ウ 不思議だ　エ 恐ろしい

ポイント　③「うつくし」には、現代と同じように「美しい」という意味もある。

4 古語の意味　次の――線の言葉の意味として最も適切なものをそれぞれ後から一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 如月の望月のころ
（　）の満月のころ

ア 二月　イ 五月　ウ 九月　エ 十一月　□

② つとめては、かれらが朝寝したれば、……
（　）は、彼らが朝寝坊していると、……

ア がんばって　イ 思いやって
ウ 早朝　エ 勤務中　□

③ 別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜ふけぬ。
別れがたく思って、一日中あれこれして、（　）うちに夜がふけた。

ア 大声で騒ぐ　イ 悪口を言う
ウ 非難する　エ 相談する　□

④ 秋の月は限りなくめでたきものなり。
秋の月はこの上なく（　）ものである。

ア 変わっている　イ うれしい
ウ 縁起のよい　エ すばらしい　□

⑤ 女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに……
女御、更衣などの女性が（　）お仕えしていらっしゃった中に……

ア いきなり　イ 少しずつ　ウ たくさん　エ あわてて　□

ポイント　③「ののしる」や④「めでたき」などは、現代とは違った意味で使われている。

5 助詞　次の各文を現代語に直すとき、□に当てはまる助詞を、それぞれ平仮名一字で書きなさい。

① 下手にもよき所かならずあるものなり。

→技が優れていない人にもよい所 □ 必ずあるものである。

② さも知らぬ木の実取り食ひ、知らぬ鳥とらへて、その皮をはぎて身にまとひ、肉をほして食にたくはふ。

→よく知らない木の実 □ 取って食べ、よく知らない鳥 □ 捕らえて、その皮をはいで身にまとい、肉を干して食糧として蓄える。

ポイント　現代語で読んだときに、自然な文になる助詞を当てはめる。

6 主語　次の——線の言葉の主語に当たるものを後から選び、記号で答えなさい。

聖なれど、無知なれば、かやうに化かされけるなり。猟師なれども、慮りありければ、狸を射殺し、その化けを現しけるなり。

（聖＝立派な僧　かやうに＝このように（狸に）　慮り＝思慮　化け＝化けた正体をあばいたのである）

〈「宇治拾遺物語」より〉

ア 聖　イ 猟師　ウ 狸　□

ポイント　「聖」と「猟師」を対比している文章であることを押さえて考える。

7 会話文　次の古文には、会話文の開始のかぎかっこ（「）だけが付いています。会話文の終わりの三字を古文中から抜き出しなさい。

女をば草むらのなかにおきて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬす人あなりとて、火つけむとす。

（盗人は）女を草むらの中に置き去りにして、逃げた。道をやって来た人たちが、「この野には盗人がいるようだと言って、火をつけようとする。

〈「伊勢物語」より〉　□

ポイント　会話文の後に付いて、引用であることを示す言葉を探す。

8 会話文　次の古文中から、「　」を付けることができる部分を二つ抜き出し、それぞれ初めと終わりの三字を書きなさい。

ある池で、蛇と亀と蛙が親しくつきあって住んでいた。

日照りして、池の水も失せ、食物も無くして、飢んとして、つれづれなりける時、蛇、亀をもて使者として、蛙のもとへ、時のほどおはしませ。見参せんと言ふに、蛙、返事に申しけるは、飢渇にせめらるれば、仁義を忘れて食をのみ思ふ。情けもよしみも世の常の時こそあれ。かかるころなれば、えまゐらじとぞ返事しける。

（飢＝うえ　食＝じき　沙石集＝しゃせきしゅう）

〈「沙石集」より〉　5

日照りになり、池の水も干上がってしまい、食物もなくなって、飢え死にしそうになり、何もすることがないとき、蛇は、亀を使者として、蛙のところへ行かせ、ちょっとの間いらっしゃい。お目にかかりたいと言うと、蛙が、返事に申したことには、飢えや渇きに苦しめられると、仁義を忘れて食べることだけを思う。情けや親しいつきあいも通常であるときこそあるものだ。このようなときなので、お伺いできないと返事をした。

□〜□　□〜□　5

ポイント　登場するのは蛇と亀と蛙。誰が誰に話しているのかを押さえたうえで、会話文の前後に付く言葉を手がかりにして探す。

9 係り結び　次の古文中から、係り結びになっている係助詞を抜き出しなさい。

① 近き火など逃ぐる人は、「しばし」とや言ふべき。近い場所の火事などで逃げる人は、「ちょっと待て」と言うだろうか、いや、言わない。　□

② 歌をなむ詠みて出したりける。歌を詠んで（外にいる男に歌を）出した。　□

③ おし起こしてせめて物いふこそいみじうすさまじけれ。（眠くてたまらないのに、）揺り起こして無理やり話をするのはたいへん興ざめだ。　□

ポイント　「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の五つの係助詞を覚えて、文中から探す。